
ヤミとカゲ

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤミとカゲ

【Nコード】

N5376R

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

少年の故郷が魔王に滅ばされてしまった。魔王は強力な力を持つという闇蜥蜴やみとかげを蘇らせようとしている。少年は闇蜥蜴の復活を防ぐため、魔王よりも先に、4つの秘宝ガラクタを集めると誓う。滅びた故郷に別れを告げ、秘宝を求めて旅立った。

——そしてある遺跡に來た時、少年はスライムと出会い、なぜか二人で旅をすることになった。

なんと1話200字で書いているので、すらすら読めるって程度

じゃない！ さくつと？読めます。

1・不安定な宵闇が訪れつつあった。

大地に芽生えた一つの樹は空を網羅している。

太陽の沈みかけた空はほんやりと赤くにじみ始めている。それは光と闇が交替する時間の訪れであり、繰り返されている。

相反する闇と光が入り混じる空間は、何もかもを曖昧にしてしまう。時として闇は光に擬態し、光は闇に転じる。何もかもが交じり合い、全てが風化していく。

その狭間に渦巻く風は、草原を流れ、海原を駆ける。

樹々のざわめきと、草木の包み込む香りが、髪を撫でていく。

2・思い出の樹の下。

グイは、目を開いた。

グイが触れている木の根には、かつての記憶が刻んである。
友人たちと、兄弟たちと、背比べをした痕。
夕闇と共に淡く消え去った過去の思い出……

グイは、その傷に指を走らせる。

大木にまた一つ小さな水滴が落ちる。

グイは、目を閉じる。

懐かしい情景が、ほんやりと浮かぶ……

晴れわたった空に漂うのは白い雲だった。

山の山頂は、まだ雪に覆われていた。草原にも、所々、白いものが残っていた。

「僕の……故郷」

3・幸せの記憶。

日差しは柔らかく、地上を照らしている。海からの風がどこからか、樹華の香りを運んできた。

木で出来た人家が見えてきた。小さな懐かしい集落だ。

グイは一步踏み出した。

柔らかい土に肢跡がつく。集落は、太陽の光に包まれているように見えた。

もう一步、踏み出した。

肢元の泥の大地に、新しい芽が輝いている。

グイは、手を伸ばしそれに触れようとした。

しかし赤い水滴が滴り落ち、命を塗りつぶした。世界に赤いものが現れ始めた。

4・赤い赤い色。

暁闇の鼓動……

赤い染みは、広がっていく。家も、平原も、空でさえも飲み込んでいく。

その赤黒い水溜りの上に人が浮かんでいるのを見た。

……後退りする。

それは、見覚えのある容かたちをしていた。
似たようなものが、同じように転がっている。

……全て、赤い……

これは、悪夢だ……

夕焼け空、草の香りの下。

眼を閉じると、いつも同じ風景が、風に乗ってやってくる。
耳を澄ますと、やがて同じ言葉が、遠くから聞こえてくる。

5・タスケテクレ

その言葉をかつて、グイは聞いたのだ。

その言葉が夢の中までも侵入し、いまだグイを苦しめている。

赤い記憶の呪われた夢。

突然の闇が羽ばたくように深く舞い上がる。

赤い闇の中で、ただ一人だった。

「タスケテクレ」

みんな、いなくなってしまった。

「タスケテクレ、タスケテクレ」

赤黒い人影たちは、口々に言う。

「タスケテクレ、タスケテクレ、タスケテクレ、タスケテクレ……」

呪文のように、彼らは、その言葉を繰り返していた。

6・嵐の前の静けさ。

グイは目を開いた。

樹の間から見える空は湖面のように静かである。群れをなした純白の鳥が澄みきった空を横切る。おそらく森の巣へ帰って行くのだろう。

――帰る場所があることは、いい事だ。

湧き上がるこの感情はグイにとって邪魔であった。グイの帰るところはもうない。全て燃えさかる赤の中に滴り消えてしまった。

まだはつきりとしなない淡い風景の中を、グイは覚束無い足取りで歩き出す。

それは静かすぎる暁闇の夕暮れであった。

7・嵐の風景。

針葉樹の密林が波打つように揺らされている。黒く厚い絨毯に覆われた空に、獣のような唸り声が響く。天を裂く白い煌きが、闇の中にある山の稜線を浮き上がらせ、轟音と共に一本の樹を貫いた。

――それが合図だった。

一滴の水が落ちてきたかと思うと、ごうごうと雨は地を激しく打ち始めた。

風はますます激しくなり、木々が悲鳴をあげる。普段はおとなしい大河も次第に透明感を失い、波打ちながらすべてを飲み込めんと渦巻いている。

8・故郷が狙われた理由。

グイはひとり雨宿りしていた。

故郷を離れてどれくらい経つだろう。魔物に占領され、故郷が滅ぼされてから。

グイの故郷は水に囲まれており、故郷に行くには船で渡るか、空から行くか、それとも子供がやっと通れる抜け道を通る以外に方法がない。

そのような特徴をどこから聞きつけたのか、グイの故郷に魔物がやってきたのだ。そう、この不便な土地を利用した自分の拠点を建てる。そんなことのために、故郷は滅ぼされてしまったのだ。

9・魔王の名前と旅の目的。

魔王の名はジョバリア。ジョバリアは封印された闇蜥蜴と接触し、封印を解くことを約束に力を授かった1匹の魔物だった。力を得た魔物は魔王と名乗り、グイの故郷で闇蜥蜴の封印をとくための儀式を行おうとしているのだ。

——グイは故郷を取り戻したかった。

いや、故郷を滅ぼされた怒りの感情を悲しみの叫びを、魔物を追い出し故郷を取り戻すという自己満足にも似た復讐を目標にしなくては、生きていくことに耐えられなかったのだ。

10・蜥蜴の言伝え。

グイは特に闇蜥蜴の運命を左右するという四つの秘宝「ガラクタ」を捜していた。「ガラクタ」は四匹の蜥蜴が持っていると言われている。それを魔王より早く集めれば、グイの使える唯一の呪術でも何とか対抗できると思っていた。

四匹の蜥蜴は闇蜥蜴と同じ次元の生物であるが、世界を守る役目を持ついわゆる闇と対を成す光の存在であった。

グイはそのことを知っていた。彼だけではなく、この世界に生きる人なら誰でも知っているのだ。

10・蜥蜴の言伝え。(後書き)

ガラクタという言葉は、壊れているような感じと雑多な印象の語感が、素敵な響き。

遺跡や蔵の中から出てくるものは、使い道や価値がなければ、ただのガラクタも同然なんです。

興味がない人にとっては、どんな価値があらうとガラクタはやっぱりガラクタです。

長い年月を経れば、ガラクタではなく芸術品になったり、学術的価値が出たり、意外な使い道があらわれたりします。

今はガラクタでも、いつの日か注目される日が、くるのかな。

11・遺跡を目指している。

グイは遺跡をめぐっていた。

ガラクタを持つ蜥蜴たちは、遺跡を転々としているのだ。それを見つけ、会うのは難しいが、どうしても彼らに会わなくてはいけないのである。闇蜥蜴を復活させないために、ガラクタを手に入れるために、何よりも故郷を取り戻すために、グイは遺跡を廻っていた。

目的の遺跡まで、もう少し。

しかし、この強い嵐が行く手を阻んでいる。もう少し雨風が弱まるまで、高台にある洞窟でもう一眠りすることにした。

12・崖の上の遺跡。

そう、ここは崖の先端にほど近い場所にある遺跡である。そびえ立つ白亜色の遺跡は、違和感なくその場所に建っていた。

手の届くほど近くに空がある。高緯度にあるこの遺跡全体は、空中都市と呼ばれている。

天の世界に一番近い場所にある遺跡……響きは良いのだが、実際にはいくつかの小さな祭壇があるだけの比較的小さな遺跡だ。

噂によると、ここに蜥蜴が立ち寄ることがあるらしいが、それを除けばただそれだけの古びた遺跡なのだ。

13・祭壇に置かれた壺。

この遺跡は、海の近くにある。

耳に届くのは雨と風と波の音。

所々に開く穴からは外の景色を望むことができる。望むことのできる静かな海は、何十億年もの間、絶えることなく大地に打ち寄せていた。

生命が絶滅しようと、魔法大戦が勃発しようと、魔王が現れようと、決して変わることなく。

グイが飛び込んだ空間には祭壇があった。

その祭壇の上には、巨大な灰色の壺が安置されていた。特に目立つ装飾も無く、それはその場所にあった。

14・壺の中身。

高鳴る胸の鼓動の音を聞きつつ、グイは、壺を覗き込む……
今度こそは、何か見つかるような気がしたのだ。

この遺跡には、なにか不思議な気配が漂っていたのだ。

しかし、覗き込んだ壺の中は、ただ灰色の暗闇が続いているだけであつた。

グイは、思わずあたりを見回した。

静寂を揺るがす水音が、微かに聞こえるだけであつた。

何もない、殺風景である。

記憶の積み重なるこの空間は、時さえも遺物として、止まり続けているように見えた。

15・魔物と遭遇する。

グイは、舌打ちした。

世の中が上手くいかないというのは、このことだろう。目的の物がそう簡単に見つかるとは思っていなかったが、こうも難しいものだとは、現実是非常に厳しいものである。

グイは引き返そうとした。

その時、何か刺すような視線を感じた。これは、殺気。グイは、気配のする方を見る。

柱の陰、暗がりには赤い瞳が光る。それは、魔物だった。

「なんだ、餓鬼か……」

そう言いながら、頭に2本の角が生えた魔物が現れた。

16・魔物と対峙する。

殺気みなぎるその魔物はどう見ても、グイに対して友好的な感情は持ち合わせていないだろう。

「丁度、腹が減ったところだ。食ってやろう」
にやりと笑う。

いたぶって、弄って、絶望の中に沈めてから……魔物は獲物をどう調理するか考えているようだった。

グイは身構える。1匹くらいなら何とかなるかもしれない。

「くくく、そうではなくては、狩りは楽しくない」

それこそ極上の娯楽。この魔物にとって抵抗なき狩りは、つまらないのだ。

17・戦闘開始!

魔物はしなやかな尾をグイ目掛けて振り下ろした。グイは難なくその攻撃をかわす。

グイは態勢を低くし、魔物の肢を斬りつけた。しかし、攻撃は命中したものの強靱な肉体の前では、たいした傷にはならなかった。勝負は五分五分であった。

幾度目かの火花が散った時、二人の動きが止まった。

彼らは動かなかった。お互いの力が均衡を保っていたのだ。

それは嵐の前の静けさに似ていた。

しかしふとした瞬間に、勝負は決まってしまうのだ。

18・拮抗を破り……

……その沈黙を破り、先に動き出したのは魔物の方であった。鋭い爪を振りかざし、グイを斬りつけた。

グイは再び飛び退く。しかし、魔物はその動きを予測していた。すばやく態勢を立て直し、グイ目掛けて再び爪を振るった。

グイはその攻撃に遅れながらもかろうじて反応した。爪はグイの服を裂いた。血が服ににじみ出た。

「……くっ」

グイは辛うじて、急所を避けた。しかし、膝についている暇はなかった。

魔物が再び動き出したのだ。

19・危機的状况。

魔物は突進する。グイは避けようとしたものの、突き出た角の攻撃を食らってしまった。その反動で壁にぶつかる。

口の中に液体が広がるのを感じた。鉄のような錆付いた味、あまり良い味とはいえなかった。

……勝てそうにない。

グイは生命の危機を感じた。

立ち上がろうとして、グイはふらついた。受けた衝撃は思ったより、大きかったのだ。偶然にもふらついた手の先には、天井から垂れる紐があった。グイはそれを引いてしまった。

20・落ちてきたものは。

「ウピュー」

奇妙な声と共に上から何かが落ちてきた。その蒼い物体は何回か弾んで地面に着地した。

「痛いピュ」

現れた生命体は、手らしい器官で頭をなでる。

「プテリの優雅な昼寝のジャマをしないで欲しいピョ」

グイは見上げた。紐で簡単にこしらえたハンモックが揺れていた。この生命体はそこから落ちたらしい。

スライムとはあんな物で寝るのだろうか？　もしかするとスライムの身体は、思っているほど柔らかくないのかもしれない。

番外編・こんな時に、自己紹介。

★テプリの独り言★

「プテリは悪い魔物じゃないっピヨ。好きなものは棒つきの渦巻き飴っピ。でも泡の出る飴も好きっピ。実は好きなものは、色々悩んでいるっピヨ。そして、趣味はお経を読まないことっピ。お散歩も昼寝も好きっピ。これも、ひとつに決めるのは難しいっピ」

プテリを仲間にしますか？

↓はい

いいえ

「あれ？ 何でプテリの名前がプテリって分かったっピ？ すごくッピヨ」

くりっとした瞳を輝かせて、プテリは見上げている。

21・無邪気な魔物。

「血が出ているピョ！　ケガしているっピョ！」
グイの怪我を見て、スライムのプテリは飛び跳ねた。この生命体はどうやら人に慣れていているらしい。人に対する敵意は感じなかったのだ。

「ウピヤー、それに顔が大きいマモノさんっピョ！」
テプリは、魔物の姿を見つけこう叫んだ。

魔王の手下は、スライムの『顔の大きい』という言葉に、反応していた。動きが止まっている。

きつと、顔が大きいことに対して、劣等感を持っていたに違いない。

22・逃亡のチャンス。

テプリの発した言葉により、魔物は固まっていた。

これはチャンスかもしれない。

魔物が我に返り、突進してくる前に逃げよう、とグイは考えた。

考えついたら、そこから早い。グイはプテリを抱え、崩れた石像隙間を潜り抜け隣の部屋へ逃げる。

これで、多少は時間稼ぎにはなるだろう。

「おい、こら、待て。逃がさんぞ！ 捕まえてまとめて食ってやる。気にしていることを、よくも！」

魔物は逃げるグイたちに気がつき、追いかけてくる。

23・そこは地上までの距離が遠い場所。

背後の柱が魔物の頭突きにより、崩れ落ちた。外にある遺跡ほど風化が激しいものである。この遺跡も例外ではないようだ。

グイは足や腕を傷だらけにしながら、息を切らしながら奥へ進んでいく。グイが入った部屋は、半分が崩れ、屋根も壁もない柱だけ残った部屋に出た。

空からは、いまだに雨粒が地上に降り注いでいる。嵐はおさまりつつあったが、雨風はまだまだ強かった。水はけの悪い灰色の地面には、すでに小さな川ができていた。

24・そして、天空の世界に一番近い場所。

水の臭い、湿った空気は故郷を思い出す材料になる。

故郷が滅んだ時も雨が降っていた。故郷に出来た水の川は赤かった。生暖かった。

あの状況では、死んでもおかしくなかった。

しかし、こうして生きてここにいる。これも運命の一つだろう。

でも、でも、また魔物がいる。魔物が来る。

「もうだめかも」

今はもうない故郷。あの青い海と、白い雲と、緑の嶋と……。

グイはこの故郷から離れた場所で、一人死んでいくことを悲しく思った。

25・励ます声。

「しっかりするっぴい！」

プテリは、ふるふる揺れながら言う。

「何かを恐れていては、何もできないっぴ」
絶望にうな垂れるグイの目の前で。

「……って、おいらのパパが昔言っていたっぴ」

誰かの受け売りだった。が、今のグイには心強く思えた。

——再び遺跡が揺れた。脆い床の石が崩れ、グイたちはその歪の中へ滑り落ちた。

「今日は落ちてばかりっぴヨ……」

グイ達が落ちたすぐ近くには、青い鱗を装飾としてあしらった壺があった。

26・青い鱗の壺を見つけた。

遺跡に漂っていた不思議な気配は、この壺からのものだったのだろうか。

この壺を調べれば何か蜥蜴の手がかりが見つかる可能性もあった。つい昨日まで儀式に使われていたようなどこもひび割れていない、新しい壺であった。

しかし、しっかりと封印がなされている鱗の壺は、グイの力では紐一つ解くことは出来なかった。

「見つけた」

その言葉と共に、グイは我にかえった。

グイは今置かれている危機的状況を、すっかり忘れていたのだ。

27・出っ張りは、押すためにある。

一方、プテリはまだ魔物に気がついていなかった。そもそも今が危機的状况ということを理解していないのだ。

プテリは、ただツボの下の方の一点を見ていた。

低い目線でない見つけれない場所、形を変えられるスライムではないと押せないような奥まったところにある、押せそうなお出っ張りを見つけたのである。

出っ張りという物は、その存在自体が「押してしまいたい欲求」をかき立てる。

プテリは欲望に忠実に、その出っ張りを押した。

28・壺の中からどろどろ流れ出る。

一瞬の沈黙の後、かちりと音が響いた。押した所を中心として、ツボに細かなひびがはいっていく。次第に広がり、大きな傷となっていく。

その割れ目から蒼い液状の物質がでろりと漏れ出た。

「き、きもち悪いッピョ……プテリは、何もしてないっピョ……」
中から出てきた気味の悪い色をした物体を見て、同じような形状をしているスライムは一人とぼけていた。

誰も気づかぬこの状況下、このプテリの行動がグイの命を助けることになる。

29・魔物を屠る者。

グイと魔物は睨みあったまま動かない。

「もう逃げ場は無いぞ」

魔物は突き出る牙を見せた。その口によって、何人もの人が彼の胃袋に送られただろう。

グイは目を閉じ、最後の時を待った。人間、時には諦めが肝心だ。しかし、次の攻撃が繰り出されることはなかった。

グイは片目を開いた。その目に映ったのは、膝をついた魔物の姿であった。

そして次の瞬間、とどめとばかりに水の刃が魔物を裂く。その刃は上級魔術師が繰る魔術である。

30・消え行く魔物。

「そ、ン、な、馬鹿、な。蜥蜴の封印が解けるなんて……」

グイは、壺が割れていることに気がついた。

先ほどプテリが割った壺、あれが封印の壺だったらしい。

「こんなに簡単に封印の壺が割られるなん、て……」

すでに影が薄くなりつつある魔物は、前脚こぶしを床に打ちつける。

「くそおおお……」

灰の山が、風に吹かれて崩れていくように魔物の姿は消えていった。

そう、生命の火が消えた魔物は何も残さず消えてしまうのだ。

31・壺の中に入っていたもの。

魔物が消える現象と入れ違いに、魔法を放ったと思われる光がグイに近づいてきた。それは徐々に輪郭がはっきりとしてきた。

「我は水をつかさどる蜥蜴。闇蜥蜴の使者のかけし封印を解いた者達よ、礼を言うぞ」

グイの背丈3倍は有ろうかという碧色の蜥蜴が、今その姿を現した。

伝説の蜥蜴が目の前にいる。

グイは声をかけようと口を開いた。

「言わずとも分かっておる」

しかし、碧蜥蜴にはグイの言おうとしていた事を知っていたようだ。

32・ひとつめのガラクタ。

「危うく……闇蜥蜴の使者の手に渡るところであつた……」
「どうやら魔物に「ガラクタ」を奪われて、壺に封印されていたらしい。」

「お主は、これが欲しかったのだろうか？」

蒼蜥蜴は、魔物の消えた辺りから黒い角を拾い上げ、グイに手渡した。その「ガラクタ」は、まるで剣のように鋭い光をたたえていた。

グイは蒼蜥蜴を見上げた。意を決し、この蒼蜥蜴に鱗を貰えないか交渉した。

蒼蜥蜴は戸惑いながらも、腕の鱗を一枚グイに手渡した。

33・全ては蜥蜴のみ知る。

「お主なら、大丈夫かもしれん」

意味ありげな言葉を言うと、蒼蜥蜴は消え去ってしまった。

「何でウロコをもらったピヨ？」

実を言うとプテリにも鱗があるのである。液状のために目立たないだけなのである。

プテリは自分の鱗が欲しいと言われたら困るので、その理由が知りたかったのである。

ちなみに、グイが蜥蜴の鱗を欲しいと思ったのは、鱗には魔力が宿っているからであった。御守り代わりに、グイは記念にそれが欲しかったのだ。

34・仲間と一緒に旅をする。

旅というものは道連れがいたほうが良い。例えばそれが異種族だとしても。

お互い、知らない世界のこについて語りあえる。
魔物は魔物の、人間は人間の、それぞれの生活を。

外の世界で常に暮らしている魔物は、色々知っていた。

町の中のことしか知らなかったグイは、魔物の生き方について興味を持った。

プテリも、きっと同じだっただろう。

一人と一匹は、遺跡を廻るたびを続ける。

今回探索する遺跡には、目的のモノがあるのだろうか？

35・巨大な遺跡を探索する。

崩れた建物の瓦礫と、名も知らぬ草木に挟まれた道が広がっている。

その遺跡はあまりにも巨大な遺跡であった。

一度に探索できる範囲に限りがあったこともあり、遺跡の奥深くに着く頃には、日も暮れかけてきた。あと数時間もすれば、すっかり闇に包まれてしまうだろう。

廃墟ともいえるこの遺跡には、こんな噂がある。夜な夜なアンデットと呼ばれる魔物が闊歩しているらしい。大量の人骨が発見された場所という理由によるものだろう。

36・アンデッドなんているわけがない！

「こ、怖いピヨ」

プテリの体がいともよりもふるふると震えている。
どうやら魔物でもアンデッドは怖いらしい。

しかし、アンデッドは見たことある人が限られているのが特徴である。

能力がある人には、簡単にその存在を感じることが出来てしまうらしいが、その能力はないのかグイはまだ見たことが無かった。
この世に存在するかどうか怪しいものである。

「そういうグイも、震えているっピヨ」

怖いものは、やはり怖いに決まっている。

37・この古代都市が滅んだ理由。

遺跡で見ることが出来る記号や文字は、伝説を語っている。

グイには、解読不可能な専門用語や、幾何学図形の方が遥かに多いかったが、闇蜥蜴は破壊しかもたらさないと、そう物語っていた。

かつて蜥蜴の力を使い、繁栄した古代都市である。どの建物も硝子と呼ばれる透明な石が窓にはめ込まれ、夜でも部屋の中は昼のように明るかったという。

しかし、この繁栄は突然終わってしまう。

闇蜥蜴によって、全て破壊され滅んでしまったのだ。

38・闇蜥蜴は破壊しかもたらさない。

行き過ぎた力は、破壊しかもたらさない。この遺跡の歴史を紐解けば、それを如実に物語っている。

そして、今、ジョバリアはその恐ろしい闇蜥蜴を、蘇らせようとしている。

ジョバリアが闇蜥蜴の力を持て余し暴走させ、自ら滅ぶことになればいいのにと、グイはふと思った。

どんな賭け事よりも当たりがくる確率の低い現象だが、まったく起こらないともいえないのである。

しかし、暴走した闇蜥蜴がほかに被害を及ぼさないとは思えない。

39・静けさを乱す爆発音。

風の音しか聞こえないこの空間は、生命が居てはいけなような
雰囲気だった。

清々しいはずの草の香りも、崩れた建築物の中を吹き抜ければ、
水気の無い砂埃と共に舞い上がってしまう。

だいぶ日も落ちてきたので、そろそろ寢床を探し始めようと思い
始めた矢先、爆音にも似た音が聞こえた。少し離れたところで、煙
が上がっているのに気がついた。

誰かが戦っているような、そんな雰囲気だ。

グイはそつとその場所に近づき、覗き込んだ。

40・蜥蜴が何かに襲われている。

何か大量の黒いものに襲われている巨大な蜥蜴がいた。

蜥蜴は、風をまとい黒いものを蹴散らしているが、それは勢い衰えることなく次から次へと現れる。誰かが延々と召還しているに違いない。

生命の危機と言うほどではないが、言葉ではうまく表現できないぬめりとした様子に、生理的に、背筋が震えるのだ。

「気持ち悪いっぴ」

プテリも、同じことを思っているらしい。

この感情は、魔物も人間も基本的には、変わらないのかもしれない。

41・操る術者はどこだ？

蜥蜴にまわりついている黒いものから、とにかく助けなくてはならない。

どこか近くに、あれを操っている術者がいるはずだ。

グイは、注意深く観察する。

黒いものの流れは、不規則ではあるが、ある一点から、はじまっている。

あの柱の影、その近くに術者はいるはずだ。

「プテリはここで待ってて……」

もしも彼が敵ならば（ほぼ間違いなく敵だろうが）、その時は戦いになるだろう。戦闘においてプテリは、足手まといでしかないのだ。

42・魔の者の姿を確認する。

柱の影が見える位置まで移動する。

いかにも闇の者が好んで身にまといそうな黒いローブ姿が見えた。尖った耳、服の裾からのぞくしっぽ……到底、人間には見えない魔の者の姿。

彼は蜥蜴に夢中で、グイの存在に全く気がついていない。

今なら奇襲できるかもしれない。

幾分か戦いに慣れたと言っても、もともとは普通の村人であったグイにとって、戦いは常に命がけ。

どんな卑怯な手を使おうと、勝つためには手段は選んでいられないのだ。

43・奇襲攻撃！

グイは意を決した。

剣を構え、勢いよく、しかし気配や音を殺しながら、襲い掛かった。

他の力に頼って隠れて戦う者は、接近戦には向かない。しかも、相手は術を使うのに集中していた。不意打ちは成功し、勝負は一瞬でついた。

術者が倒されると、魔力の供給を失ったものが一斉に空気に散っていく。

グイは消え行くものの合間から、蜥蜴を見つめた。

翠の鱗が美しい蜥蜴である。

成り行きを全てを悟った、蜥蜴がグイのもとに寄ってくる。

44・ふたつめのガラクタ。

「われは、風をつかさどる蜥蜴なり。……煩い輩を、追い払ったことに礼を言うぞ」

体についている魔力の残滓を掃うように、体を震わせながら翠蜥蜴は言う。

「噂は風から聞いておるぞ。『ガラクタ』を集めている者が、近いうちにここを訪れることを」

この蜥蜴は風をつかさどっているのだ。

「助けてくれたお礼じゃ、これを受け取るが良い」

このガラクタは白銀で出来た首飾りである。扇状の装身具は見方によっては翼のようにも見える。

45・やっぱり記念にもらう。

グイは、蜥蜴に鱗を一枚貰えないかと、ついでに交渉してみた。

「よからう持って行くがいい」

蜥蜴は1枚鱗をはがしグイに手渡した。

「また記念にピヨか。グイも好きッピヨね」

プテリは飽きたように言った。

一回集めだすと、全種類集めたくなるのが、収集家の定めと言うのか、言わないのか。

「とてもきれいだしね」

翠の鱗は宝石のように煌くのだ。

グイは鱗とガラクタを大切にしまう。これで、ガラクタは二つに、鱗も二枚となった。

46・古びた神殿はさびれている。

神殿は天井が高く塔のようであり、無機物な墓標にみえた。絡みついた植物の細い茎は、先端に行くほど褐色が強くなっている。弱々しい植物は、海からの風に揺らされ乾いた音をたてる。

この遺跡は、魔王が現れるまでは観光地であった。しかし、魔物が遺跡に現れるようになってから、訪れる観光客はいなくなった。今は観光する人がいないが、その美しい建物はしっかりと残っている。魔物がいなくなれば活気が戻ってくるかもしれない。

47・回廊を進む。

神殿の内部は昼間でも薄暗い。

苔が敷き詰められた絨毯のように生え、ますますこの空間を光の世界から遠ざけている。

筒型の壁に沿うように螺旋階段が上に伸びている。上のほうに続く階段は屋上へ出るためのものであり、グイにとっては何の意味も無かった。重要なのはこの通路の奥、この長い廊下の先にある部屋である。

通路の左右には装飾のされた柱が左右対称に並んでいる。その回廊を魔物を蹴散らしながら、奥へ奥へと進んでいく。

48・燃えるような赤。

長い回廊を進んでいくと広い場所に出た。何かの儀式を行うために使っていた大広間であろう、壁一面に鮮やかな朱で描かれた文様が刻まれていた。

その部屋には何か赤く輝く巨大な生き物がいた。口もとに並ぶ牙や手足の爪は鋭く、赤い鱗は燃え上がるように赤い。炎の化身と言われる蜥蜴だ。

突然に現れたグイに驚いたのか、蜥蜴は何も言わず突進してきた。身体の高い蜥蜴の動きは容易に予測がつき、グイは苦もなくその攻撃を避けた。

49・熱き炎の攻撃。

攻撃の当たらない蜥蜴は大きく息を吸う。それは火を吐く合図である。

グイはとっさにプテリを抱え柱の陰に隠れた。プテリの歩く速さは、お世辞にも速いとはいえないのだ。

蜥蜴の発する炎によって発生した砂煙が巻き上がった。炎は柱を焦がしていく。

「あついっピョ……！」

グイの腕の中で、プテリの身体が溶けかかっている。スライムは熱に弱い者がほとんどである。炎の熱はグイの体力も奪っていく。

早く何とかしないと、いけない。

50・飛び降りて、攻撃する。

グイは砂煙に紛れ、柱を登り、蜥蜴の頭上に移動する。相手の視界が遮られているうちに意外な場所まで移動する。とても単純だが、よく使われる戦術である。

ある程度の高さまで登ったグイは、ガラクタを握り締める。手にしたのは鋭い角のような形をしたガラクタだ。魔法の産物であるガラクタは、簡単に壊れることはないのだ。

グイは落下の力を利用して蜥蜴の頭蓋に突き刺した。
赤い蜥蜴は咆哮をあげ、ばたんと身体が地に崩れ落ちた。

51・やっつけた!

「やっつけたっぴ?」

「たぶん」

グイは動かなくなった蜥蜴に近づく。

蜥蜴から生命の反応は、すでになかった。

「……これでよかったのかな」

急に襲われたとはいえ、命を奪ってしまったのだ。

蜥蜴は、自然の化身。

もしも仮に命を失っても、またすぐに新しい体、新しい記憶を得て復活する。

基本的に死による消滅と言う概念は存在しない生物。

そう知っていたとしても、やはり悪しき物ではない蜥蜴に攻撃をしたのは、複雑な気分になる。

52・みつつめのガラクタ。

動かなくなった蜥蜴の傍らに、曲がった鉤の爪のような形をしている物が落ちていた。装飾品のように煌く物体は、間違いなくガラクタだろう。

グイはそのガラクタを拾う。そのついでに、この蜥蜴の鱗も1枚頂くことにした。剥がれかけた鱗を見つけ、1枚だけ入手した。それは、透き通った赤い色をしていて、宝石のように美しかった。

「死体のでも、記念にほしいピョカ」

プテリは、人間という種族に奇妙な習性があることを改めて知った。

53・不気味な静けさ。

ガラクタは闇蜥蜴復活の鍵を握るものであり、4つ集めて初めてその力が発動する。魔王の手下もこのガラクタを狙っているはずなのだが、何の音沙汰も無く大人しい。

おそらく、グイに全て集めさせる気なのだろう。そして、こっそり監視していて、隙あらば奪っていくに違いない。グイは道具袋を奪われないよう、常に注意していた。そのおかげか、今まで何も起きていない。

このまま、何事も無く4つ目のガラクタも手に入れたものだ。

54・埋もれた遺跡。

「ここに蜥蜴がいるらしいよ」

グイは、町で仕入れた情報を元にこの遺跡までやってきた。

「あんまり大きくないッピ！」

見えるのは、砂に埋もれた石づくりの小さな建築物だけである。

「大半が埋まっているらしいからね」

今回訪れている遺跡は、地上にはほとんど残っていないのだ。月日がたつうちに土砂に埋もれてしまったらしい。しかし、その土砂で埋まったおかげで、風化することなく遺跡自体はそのままの形で保管されているのだ。

55・それは、単なるマッチです。

「ウピュー。底がみえないッピョ」

地下深くまで降りていく階段を覗き込む。

明かり無しでは、到底歩けそうも無かった。

グイは、道具袋から木で作られた棒状の物を取り出した。

この道具で火をつけるのだ。点け方はいたって簡単である。ちょっとざらざらした感じの板に擦る。すると火がつくのだ。

「魔法の道具ピョ！すごいピョ！」

魔物にとって、この炎の出る道具は魔法の道具に見えるらしい。

「正確には、魔法ではないんだけどね」

56・いざ、遺跡の中へ。

グイは角型の手提げ灯を取り出すと、点けた火を移した。手提げ灯に灯がともる。

「さあ、行こうか！」

「行くピヨ！」

そして、深く続く遺跡の中へ、グイとテプリは入っていった。

光があるだけで人は安心し、安全なような気がしてくるのだ。実際には、そうなるのは精神面においてだけであり、どちらにしろ先は闇なのだが……

長い長い螺旋の階段を下りていくと、行き止まりの部屋に出た。部屋の中央部の床には、魔方阵が描かれていた。

57・魔方陣に乗ってみる。

「これは場所移動の魔方陣だね」
遺跡探索をするために、基本的な魔方陣の知識は頭の中に入っている。

この魔方陣は長年使われていないようだが、まだ魔力は残っているらしい。微かな光を放ちながら、来訪者を待っていた。

この手の魔方陣は、中心に乗ることによってその魔力が開放される。

「行こうか、プテリ」

一人と一匹は、魔方陣の上に乗った。

魔方陣が輝き、空間が縦に横に伸び、そして、渦を巻く。それにともない、浮遊感が襲ってきた。

58・失われた技術が作り出す部屋。

空間の歪みが収まると、不思議な空間に着いた。そこは硝子張りの空間であった。その壁は氷のようにも見える。

「動物さんが、たくさんいるッピョ」

確かに動物達がいた。しかし、どの動物も凍りついた硝子の中に閉じ込められている。

皆、眼を瞑り、膝を抱えたような格好で、眠りにについている。

「今は失われた技術を使って、動物たちを作っていたんだよ……」

ここは氷の中に閉じ込められた生物達の標本博物館のような雰囲気であった。

59・ここは失われた研究所。

この場所には凶悪な魔物もいれば、平和をもたらすと言う獣までいた。それが本物なのか、何か似せて作られたモノなのかは、グイには分からない。

しかし古代人たちはここに展示してある生物を使い、戦かってきたのは事実なのだ。ここには封印された生物達の精神や魔力が陳列されているのだ。

グイはこの遺跡にまつわる伝説を思い出していた。

もしかしたら、蜥蜴と呼ばれるものたちも、こうした場所から生まれたものかもしれない。

60・魔物の生まれた場所。

「今この世界にいる魔物たちは、最初、ここで作られて生まれたと言っているんだ」

「おいらは、卵から生まれたツピョ！」

「あはは、そういう風に言っている人もいるってだけだよ」

ある時を境に突然現れた魔物と言う生物は、大昔の人が作り出したものだというのである。何の前触れもなく歴史に姿を現した魔物の起源をここに求めたくなる研究者の気持ちは分からないでもない。それほどまでに、この場所の標本はよくできていた。

61・頭に響く声。

「動物ばかりっぴ！」

今はもう使われることがなくなった標本の中をしばらく歩いていく。

ある区画に来たとき、グイは道具袋が微かに震えているのを感じた。ガラクタが反応しているのだ。近くに蜥蜴がいるに違いない。

「この近くにいるんだ」

グイは辺りを見回した。

眠りについた動物たちの標本がどこまでも続いている。

一体どこにいますというのだろう。

「……ガラクタを集める者よ」

そのような声が、かすかに聞こえたような気がした。

62・ケースの中で生きている。

「お主らの目の前におるぞ……」

頭に直接響く不思議な言葉を、蜥蜴は発している。

「生きてるっぴょ」

並ぶ硝子のケースの中、一つだけ生気を帯びた瞳がこちらを見ている。

「われは大地をつかさどる蜥蜴なり」

蜥蜴は、名乗る。

「これは、仮の姿、我はとうの昔にこの地で眠りについたのだな。おぬしに話しかけるために、手ごろな器を借りたのだ」

「そ、そうですか……」

グイは、おおよそ蜥蜴とはかけ離れた獣の姿に戸惑いを隠せない。

63・封じられた蜥蜴。

その声を発していたのは、ふわふわで小さな白い獣で、蜥蜴とはかけ離れた姿であった。

「あの……」

グイは口を開くが、その獣はその言葉を遮る。

「おぬしの言いたいことは分かる。我のこの忌まわしい封印を解いてくれたら、おぬしの望み、ガラクタを授けよう」

「どうすればいいのですか？」

「簡単だ、その光っている柱の前に立ち、呪文を唱えるのだ」

グイの頭の中に、不思議な言葉が流れてくる。

恐蜴が伝える言葉をグイは唱えた。

64・よつつめのガラクタ

グイが言葉を唱え終わると、今まで動かなかった器機が揺れ光が走る。

背後で硝子の壊れた音がした。

蜥蜴がああ白い獣の器から、開放されたのだろう。

割れた容器の前に、立派な蜥蜴がいた。どうやってあの小さな獣の中に在ったのか不思議でならないが、そこに存在していた。

「礼を言うぞ。では早速、ガラクタを授けよう」

蜥蜴の魔力が集まり、球形の物体が出現し始める。

その球の中には緋色の二重螺旋状の模様が作り出だされていた。

65・美しい宝玉は宙に浮かび、輝いていた。

「これでガラクタが集まったピヨ。よかったピ」
プテリは手らしい器官を使い万歳の格好をした。

「いただいでいきます」

グイは輝きながら宙に浮かぶガラクタに手を伸ばした。

と、その時である。突然、蜥蜴が口から光線をはきだした。
「なっ？」

グイはその強力な光に目をつぶった。

蜥蜴の攻撃は、周りの硝子を次々に割っていく。

硝子の中で眠った動物たちは、空気に触れると不気味な泡を体全体から出しながら、煙となって消えていく。

66・魔物の襲撃。

「ひゅー、危ない危ない」

攻撃をかわし、その隙間から、赤い瞳を持つ黒い魔物が現れる。おそらく、魔王の手下であろう。いや、確実に魔王の手下だろう。

蜥蜴は再び光線で影に向かって攻撃をする。

「遅いわ！」

魔王の手下は、自慢の脚力で避けていく。攻撃は強力だが、動作が大きいのだ。

「くくく、これはいただいていくぞ」

魔物は宙に浮かぶガラクタに手を伸ばし、奪いさって行く。

やはり、ガラクタを奪う隙をうかがっていたのだ。

67・人質とガラクタ。

グイも加勢しようと、魔王の手下を攻撃しようとする。

「これでも攻撃できるかな？」

グイの殺気を感じたのか、手下は切り札を出した。その手にはプテリがいた。

「つかまっちゃった。ピィ……」

手下の爪の先でプテリは、すまなそうにその身を震わせた。

さすが、魔王の手下、やることが汚い。

「くくく、こいつの命が惜しければ、他のガラクタもよこしな！」

ありがちな三流の台詞をはく。しかし、効果はてきめんであった。

「く、卑怯な」

68・仲間の命には代えられない。

「へんなまねをしてみろ？ このかわいい子が串刺しになるぜ」
鋭い爪は、プテリを今にも刺してしまいそうだ。

「ガラクタ入ったその袋、奪おうと狙っていたんだが、お前は中々隙を見せなくて困っていたんだ」

魔物はずっとグイたちの後をつけ、見張っていたらしい。

「俺にも、運が回ってきたなあ」

魔物はゆがんだ笑みを浮かべている。

グイはしかたなく、従おうと決め、ガラクタの入った袋に手をかけた。

「わかった、ガラクタは渡すよ」

69・そういえばと、思い出した。

「そういえば、おいら……」

グイがガラクタを渡そうと決意したその瞬間、まるで緊張感の無いプテリの声が響く。

プテリの頭に思い浮かんだ、というよりも、プテリは思い出したのだ。

「おいら、変形できったっピ」

プテリはいつもにも増して液状になり、手下の指からすり抜け地面にしたたり落ちる。

液状の生命体は変化自在なのだ。

「わ、なあっ、何い！」

液体と化したプテリを手下は慌ててつかもうとするが、その仕草が滑稽であった。

70・コップがなければ大丈夫。

「今、おいらをとらえることができるのは、コップくらいだっぴ」
床に水たまりのように溜まりながら、もはや原型の無いプテリは言う。

「実は、おいらは、すごいっぴ！」

人質がいなくなったことによって、グイはここぞとばかりに、手下に向かう。

しかし、手下は切り替えが早かった。

グイの殺気を感じると、プテリを諦め回避の行動に移る。

「俺様の使命は戦うことではなく、一つでもガラクタを持ち帰ることに」

手下はあくまで冷静だ。

71・戦力外通告を言わないやさしさ。

「それに……2対1じゃ、分が悪い」

魔物は蜥蜴とグイを見ながらそう言った。

「おいらいるから、3対1っピ！」

数に入れてもらえなかったことに気がつき、液体のままながら懸命に存在をアピールするプテリ。

（ごめん、君は戦力外なんだ……）

あえて誰もそのことに、口には出さないその優しさ。

「……とにかく、これを返して欲しくば、他のガラクタも全て持つて、魔王城へ来い。ふっふっふ」

魔物は、黒い風に包まれて消え去った。

72・奪われてしまったガラクタ。

「いっちゃったツピイ」

「大丈夫だよ、まだチャンスはあるよ」

グイはいつもの状態に戻ったプテリを優しくなでた。

4つそろえるためには、もはや、敵の本拠地、魔王の城に行くしかない。

こちらにとっては、かなり不利にはなるが。

「どちらにしろ、魔王の元に行かなくてはいけないのだから……」

そう、闇蜥蜴の封印を解くのを妨害しに行くには、行かなくてはならないのだ。

ガラクタが真の姿になるのが、ここか魔王城かの違いなのだ。

73・いつものように鱗をもらおう。

「そうだ、忘れないうちに……」

グイは、どうやら鱗も貰っているようだ。

毎度毎度の行動に、プテリはもう何も言わなかった。

「それでは、我は、事の成り行きを見守ることにしよう」

そう蜥蜴が言くと、見えなくなった。

「蜥蜴って、他人任せっぴい。そういつも思うっぴ」

「蜥蜴はあくまで、ガラクタを持っているだけで、基本的に世界には干渉しないからね……」

攻撃するものには反撃を、崇める者には力を、そんな単純な存在なのだ。

74・海に浮かぶ故郷の嶋。

海に浮かぶのは、亀の甲羅にも似た嶋。海に囲まれ、霧に包まれた嶋の都市。グイの故郷は海上都市と言ってよかった。

木々の生み出す霧に包まれ生命に満ちた嶋は、今では魔王の本拠地となっている。

細波の立つ海は、見た目とは裏腹に危険に溢れている。

一步、海に入れば、それは襲ってくる。

それは海の蜥蜴であるが、この生物は伝説上のそれとは違う。

海に棲む恐ろしい生物に対し人々が畏敬の意をこめ、蜥蜴と呼んでいるに過ぎない。

75・樹が作り出した道。

グイは故郷に行くために、秘密の道の入り口に立っていた。道といっても、それは樹の根が造り出したものである。

「ここを通れば、向こうの嶋に行けるんだよ」

海を越えたところにある嶋に生えた巨大な樹々の根が、海底を通りここまで伸びて作り出したのだ。そして長い年月が経つうちに根の中が空洞化し、道となった。

グイは、再びここを通ることになるとは思ってもいなかった。

「この先に魔王がいるツピね」

プテリはふると震えた。

76・魔王がいる神殿へ。

根のトンネルを抜ける頃には、日もすっかりと沈み、草木の寝息があたりを包んでいた。

トンネルを抜けたその先に見える建物は、おそらく魔王のいる神殿である。全ての根源が、あそこにいるのだ。

神殿に入るための門は固く閉ざされていた。押しても、引いても開きそうにない。この扉を開くには、仕掛けを動かさなくてはいけないのだ。

それは火を使った仕掛けである。

グイは火を、入り口左右に取り付けられたかがり火の燭台に灯した。

77・自動ドアの仕組み。

火は勢いよく燃えはじめる。火さえ点ければ、自動的に扉は開くのだ。

「開くまで少しかかるんだよ」

仕組みについては良く分からないが、火の熱によって空気の流れを変え、地下を流れる大量の水を汲み上げ、水を重りの代わりに使って扉を開けているのだという。そして、あの火が消えれば、水が再び地下深くに戻り、扉は自然に閉まってしまふのだそうだ。

グイは地下室で、定滑車や鎖などが複雑に絡み合っている様を見たことがあった。

78・錆付いた扉。

火をともしてしばらく待っていたが、一向に何かが起こる気配はなかった。

「何も起こらないっピ？」

プテリは扉を押したり引いたりしているが、動く気配はなかった。グイも首をかしげている。

本来なら、これで扉が開くはずである。グイは扉に手をかけるが、やはりびくともしなかった。

もう少し待ってみると、やっと入り口の仕掛けが動き出した。

実のところ、しばらく手入れをする人がいなかったなので、反応が鈍かっただけなのである。

79・開かれた扉。

一度動き始めたら後は早い。扉は重々しい音を立てながら、あっという間に開かれた。

「入り口が開いたッピ！　すごいピヨ」

テプリは紫水晶のような瞳を輝かせながら、扉が開くのを見ていた。

「実は自分でこの仕掛けを動かすのは、初めてなんだ」

いつもは、門を守るものがこの仕掛けを動かす。少しあこがれていた事ができて、グイも感無量だったのだ。

「とうとうだね」

「おいらたち、がんばるッピ！」

グイとテプリは、内部に潜入した。

80・廊下を進んでいく。

扉の開閉音は響くので、神殿に居座る魔王は既に二人の侵入に気づいているだろう。もとより、ばれずに忍び込めるとは思っていないのだ。

「何が出るかわからないから、気をつけないと」

ここは自分が知る平和な時の神殿ではないのだ。油断は禁物である。

両側の灯りが、二人の動きに合わせるように点いていく。

「すごいッピョ」

プテリは火が点く度に感嘆の言葉を上げていた。

グイはプテリの素直な反応に、笑いがこみ上げそうになった。

81・変わり果てた神殿の様子。

神殿の内部は迷宮というほど複雑ではない建物なのだが、邪悪な気配に支配され、押しつぶされそうな空間に気が滅入ってしまいうだった。

グイとテプリが向かっているのは、最上階にある部屋だ。

そこは、儀式を行うための立派な部屋であり、赤い絨毯の敷かれた高級感あふれるその部屋は、支配する者にとって重要な場所である。

魔王と自負しているのだから、当然そこにいるはずであった。それが定番、世の中の法則とも言える現象だ。

82・仕掛けられた罠たち。

水に恵まれたグイの故郷は、最先端の技術を使用した都市である。それゆえに魔王に狙われたのだろう。

仕掛けられた罠の仕組みを知らない人が訪れれば、それは解かなくてはいけない立派な罠となり、先に進むことを拒む。

しかし、元々この住人であったグイにとって、それは難問でも何でもなかった。

多少、魔王が配置したと思われる仕掛けを発見したが、急ごしらえのためか作りは粗く、知識のあまりないグイでも簡単に解除が出来た。

83・最上階にある部屋。

罫を仕掛けを解除していき、地元民だけが知る秘密の道を使用しつつ、最短距離でその場所までたどり着くことが出来た。

グイは意を決しプテリと共に扉を開く。

その部屋に差し込む月光が照明器具のように光線を発し、壁の模様を映しだしている。この風景は、全く変わっていなかった。

変わっていない懐かしい風景にグイは涙が出そうになるが、ここはこらえる。この部屋の奥に、グイの故郷を滅ぼした仇である魔王ジョバリアが居るのだ。

84・魔王は豪華な椅子に座って。

魔王は笑みを浮かべ、豪華な椅子に座っていた。

しかし、不釣り合いな豪華さの椅子に座っているせいなのか、遠くから見ているせいなのか魔王の姿は小さく見えた。

街に行けば一瞬にして町の空気に溶け込み、存在感がなくなるような人物であった。

簡単に言うとは威圧感がないのだ。

魔力と知識で成り上がった、言ってしまうえば単なる闇蜥蜴の威を借っている状態である。

そのような人物に故郷を占領されたのだ。

グイにはそれが許せなかった。

85・魔王と対面する。

「ジョバリア、お前の思い通りにはさせないぞ！」
魔王の姿を見たグイはそう叫んでいた。

「思ったよりも早く着いたな。ガラクタの方からやってくるとは、色々と手間が省けて助かったよ」

グイの姿をみたジョバリアは、悠長なことを言っている。

「闇蜥蜴は復活させない！」

「ふふふ、できるかな？」

「どきどきするっパイ……」

グイの陰から、プテリはいまいち緊張感の無い言葉を発していた。

こうして、最終決戦が始まろうとしていた。

86・破壊か、復活か。

最後のガラクタは、ジョバリアの手元の台座に浮かんでいた。

ガラクタの状態では、何をやっても壊れない。伝説どおり、四つ揃わないと破壊できないのだ。

（蜥蜴を刺すといった乱暴な行為をしても、傷一つつかなかった）
魔王の手元にあるガラクタと、グイの持つガラクタが一つになった時、使用されるか、破壊されるか、どちらか一つの運命が待っている。

「残りのモノも渡してもらおうか」

「嫌だ！　だれがお前なんかに、渡すものか！」

87・ガラクタはだれの手に？

「まあいい、力づくで奪えばいいのだからな」

ジョバリアはゆがんだ笑みを浮かべ、魔力を練り始めた。

グイは身構えたが、それは攻撃の魔法ではなかった。

「隠された真実の姿を現せ！ 封印されし闇蜥蜴の器よ！」

その合図が、台座に浮かぶガラクタの魔力を開放させる。

その魔力にグイの持つガラクタが俄かに反応した。しまったと思った時には遅かった。懷から自然にガラクタが飛び出したのだ。

ガラクタは本来の形になろうとしていた。

88・4つのガラクタは集う。

集結した四つのガラクタは、液状生命体のように不規則な動きをし始め、お互いにくっつき合い形を創っていく。それは不思議な風景である。固い鉱物であるはずの物質が、液体のように流動しているのだ。

それが終わるまでもう誰にも止められない。

そして遂に、それは一つの蜥蜴の像となった。

二人は同時に動き出した。

速さは五分五分である。身長はジャバリアのほうが有利だが、それはあまり意味はない。

それはもう運の問題であった。

89・闇蜥蜴、降臨！

先に触れたのはグイであったが、掴み取ったのはジャバリアであった。

「ふははは、やったぞ。我が力の根源たる闇蜥蜴よ、受け取るが良
い！」

ジャバリアは絶頂を極めるている。

蜥蜴の像は黒く輝きだす。

あふれ出る闇。

光をも飲み込んでしまいそうなほど、深い深遠な暗闇。

「素晴らしい力だ！」

もう世界を手に入れたも同然なのだ。

ジョバリアの背後に影が現れる。それはきつと闇蜥蜴の精神。
「ジョバリアよ、今までご苦労であったな」

89・闇蜥蜴、降臨！（後書き）

ガラクタでも、リサイクルすれば意外な宝が隠されているかもしれません。

使えなくなったり、役に立たなくなったり、壊れたり、使わなくなった精密機械たち。携帯、PC、カメラ……そんなガラクタたち。使われなくなったそれは立派なガラクタですが、その中に使われている金属^{レアメタル}なんかは、ガラクタではなく、立派な宝。

都市鉱山に眠る宝なのです。

ガラクタだからといって、安易に捨ててしまうのはもったいないのです。

90・闇に融けていく。

しかし、突然。像からあふれ出た闇が、ジョバリアを取り込もうとする。

「な、何をする！」

「くくく、もう貴様に用はない」

あつという間に闇の触手に囚われ、身動きがとれず手足をばたつかせるジョバリア。

「まずは、目覚めたてで空っぽな私のために、その身をささげてもらおうか。くくく、光栄だろう？」

「な、約束が違うぞ！ うわぁ！」

闇に染まった者は、闇に良くなじむ。

ジョバリアと影とが混ざり合い、一体化しようとしている。

91・消え行く魔王。

「な、何が起こったツピ？」

プテリは、あまりの展開に驚きを隠せていない。

「ジョバリアは、闇蜥蜴に利用されただけなんだよ。今はもう体を
得て、手足となる者が必要なくなったから……」

今まで仇だと思っていた奴が、利用されるだけされて、目の前で
あっけなくやられていく、それは哀れみというのか、虚無感と言う
のか？

「力に溺れた、あわれな奴」

闇に飲まれていく魔王の、その様子を冷静に見ている自分が不思議でならなかった。

92・少しの希望にかけて。

「おいらたちも、食べられちゃうツピ。もう、おしまいだっぴい」
「いや、まだ希望はあるよ」

今の闇蜥蜴ならば、まだできるかもしれない。
感情は停滞していたが、思考は止まっていないうだ。

「もう一度、闇蜥蜴を封印するんだ」

「そんな事できるツピ？」

「わからない。でも……」

今がチャンスかもしれない。

生き物は、その差はあれ、食事時にはどこか無防備になる。

ジョバリアが抵抗しているようなので、時間は多少稼げるだろう。

93・こんなこともあろうかと。

「やらないよりは、挑戦した方が悔いはない」
グイは道具袋から4色の蜥蜴の鱗を取り出した。

「それは蜥蜴の鱗ッピ？ どうするッピヨ？」

「成功するかは分からないんだけどね……」

今ここで、4匹の蜥蜴の鱗を媒体に使った封印の儀式を、発動させるのだ。

遺跡で本物の蜥蜴を目の前にしたとき、咄嗟にその鱗を使うことを思いついた。

水、風、土、火というような魔力四大元素を集めることが出来れば、何よりも良い媒体になるだろう。

94・呪文を詠唱する。

この機会を逃したら、ここにいる者たちでは手も足も出ない。

「やるしかないッピ。がんばるッピヨ！」

「ありがとう、じゃいくよ」

グイは眼を瞑り深呼吸する。

「嶋の子グイは、ここに命ずる。秘められたその魔力を開放せよ」
呪文の一節に反応し、鱗は一斉に煌きだした。

——水蜥蜴の鱗は蒼の炎へ、

——風蜥蜴の鱗は翠の炎へ、

——地蜥蜴の鱗は碧の炎へ、

——火蜥蜴の鱗は紅の炎へ、

4色の煌きへ変化し、グイを中心として回り始める。

95・間に合うのか？

暁闇の中、白銀の粉が降り始めた。

それは風に吹かれ、冷たく舞い上がる。

季節外れの雪が、グイの頬に当たり染み込む。

グイの詠唱に気がつき、闇蜥蜴は闇の触手を生成する。

「あ、危ないッピョ！」

プテリは注意を促すが、しかしグイは動こうとしなかった。

一度始めたら儀式は途中では止められないのだ。

果たして詠唱は間に合うのだろうか。

グイは焦らず呪文を続ける。

――全ては、一瞬で決まるのだ。

――全ては、これで決まるのだ。

96・封印のとき。

「邪悪なる因子の核に働きかけ……その時を止め、悠久の時の中」

雪風の中でグイは、目を開きながら最後の一節を唱えた。

「封印という名の凍りついた記憶の世界へ」

そして、グイは目を開き、闇蜥蜴と取り込まれたジョバリアを指さした。

——四つの炎は大きく螺旋を描き闇を包み込む。

闇蜥蜴と接触した瞬間、身体中の皮膚に鳥肌が全開するような鋭い音が響き、その封印魔法の鋭い残像のみが、いつまでも宵闇の空間を駆け巡っていた。

97・循環する歴史。

グイはやり遂げた。

封印された闇蜥蜴はガラクタの中に戻り、その邪悪な気配は消え去った。

グイは4つのガラクタを集め、それを正しい方法で破壊した。これで今回の闇蜥蜴の復活は防げたのだ。

蜥蜴は自然が具象化したモノ。完全に消し去ることはできない。だから、またいつか復活してしまうかもしれないが、その時はまた誰かが蜥蜴の作り出したガラクタを集め、再び封印するだろう。今まで、そうやって何度も繰り返されてきたのだ。

98・故郷の思い出。

「……仇は取ったよ」

眼前には大地に芽生えた一つの樹がそびえ立っている。グイの故郷を見守る樹は、変わらずにそこにあった。

根元には子供の頃に刻んだ傷がある。グイはそれに手を触れた。もう何を刻んだのか朧にしか見えなかった。

楽しかった思い出を刻んだこの傷も、いつかは消えてしまうだろう。

しかし、グイは覚えている。

グイは目を閉じた。

今もまだ降り積もる優しい雪。

全てを覆い尽くす純白の魔法。

雪の積もった白い大地。

最終話・新たな旅立ち

——今日も冷えそうだね。
母さんの優しい声。

——暖炉に火をつけましょう。
ゆれる炎に浮かぶ、懐かしい風景。

しかし、いつまでもここに居るわけにはいかない。
相棒がそこで待っている。

「行ってきます」

——もう行くのかい？ 気をつけるんだよ？ 元気でいくんだよ。

樹々の葉達の囁きを後に、グイは再び旅立ちを決意する。

「今度はどこへ行くっピョ？」

「気の向くままに……」

太陽の昇りかけた空は、ほんやりと黄ににじみ始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5376r/>

ヤミとカゲ

2011年7月6日22時48分発行